

関係代名詞とその考え方について

小寺 茂明

1. はじめに

関係代名詞というのは、高校ではかなり難しい学習項目であり、また教材の中では実に幅広く使用される項目である。中学から高校に入ると、急に数多くの英語の構文を学び、また数多くの単語を学ぶことになるが、さらに生徒は構造や用法が複雑な関係代名詞もかなり重点的に学習することになるのが普通であろう。

そのような状況の中で、多くの高校生はおそらく中学のときにはある程度の推測あるいは当てずっぽうでも処理できたことが、高校では少し勝手が違うことにすぐに気がつくはずである。関係代名詞は学習上の問題点も少なくないが、その意味でもそれは高校での代表的な学習項目であろう。ここでは、その関係代名詞とその考え方について検討し、あわせていくつかの問題点について思いつくままに取り上げてみることにしたい。

2. 関係代名詞の機能とその特徴について

関係代名詞と言えば、まず、その用語がいささか分かりにくいかもしれない。「関係」というのは「関係づける、結びつける」という程度の意味である。簡単に言えば、関係代名詞は関係代名詞節とその先行詞とを結びつけるわけである。その意味で、関係代名詞には2つの機能があるとされる。それは接続詞的機能と代名詞的機能とである。一般的に言って、関係代名詞はその両方の機能を兼ねているわけである。

さて、関係代名詞にはどのようなものがあるかと言えば、その主なものは次の3つである。(1) wh-系の関係代名詞(who と which), (2) that, および (3)ゼロ関係詞, である。もちろん、ゼロ関係詞とはいわゆる接触節のことである。

次に、これらの特徴について考えてみたい。

(1) wh-系の関係代名詞

この主なものとしては who, which があり、who は先行詞が「人」のときに、which は先行詞が「物」のときに用いられるという区別がある。また、人称代名詞と同じように、格変化がそろっている。その意味では特に who は代名詞としての性格が強いと考えられる。きわめて人称代名詞的なのである。さらに制限的用法と非制限的用法との2つの用法がある。

(2) that

これは「人」にも「物」にも用いられる。つまり、先行詞が何であるかを問わないということである。ただし、先行詞に the only, the first などが伴うときには that が選好される。その意味では、that はそのような特徴のある先行詞と対応するということであり、そのような場合の関係代名詞は必ずしも wh-系の関係代名詞でなくてもよいということになるのであろう。それなりの特徴があるがゆえに、that で十分ということなのである。また、that についての格変化には目的格があるとは言えるが、所有格はない。とりわけ of whom に対するような of that は考えられない。前に前置詞はこないのである。格変化は明らかに不十分であり、その意味で、むしろ代名詞的な性格は弱く、接続詞的な性格が強いと云わざるを得ない。つなぐだけの機能にほぼ徹していると言ってよいであろう。また、そのために、(原則として)制限的用法しか存在しない。そして、先行詞が何であるかを問わないということは、やはりつなぐだけの機能を果たしているということなのである。

(3) ゼロ関係詞

これも「人」にも「物」にも用いられる。やはり先行詞が何であるかを問わない。また、格変化はない、というよりそもそも関係代名詞としてはゼロの存在であるので、ゼロならば代名詞的な性格はないに等しい。ただ接続詞的機能を果たしているだけで

ある。その意味では that の場合に似ているところがある。しかも、このゼロ関係詞はあくまでもゼロであるから、関係代名詞の合図としては that のような簡単な合図すらないということである。その意味では、後で指摘するように別の合図が存在するのである。

以上のように、wh-系の関係代名詞は、つなぐだけでなく、格変化がそろっているために、先行詞との格・数などの照合が必要であり、その分いわば文構造が論理的にしっかりとしていることになる。それは、どちらかと言えば代名詞的な機能が大きいと言えるであろう。一方、that およびゼロ関係詞は、ただつなぐという機能のみを果たしていると見てよい。特にゼロ関係詞はその感が強い。that についても、つなぐだけであるので、先行詞の種類も問わないし、格の受け渡し(照合)なども不要であるとも言える。かくして、wh-系の関係代名詞は代名詞的機能に重点があり、that およびゼロ関係詞は接続詞的機能に重点があると考えてよい。

3. 先行詞とのつながり(密接度)——ポーズを入れられるか

こう見てくると、ゼロ関係詞は先行詞とのつながりが強く、いかにも軽いフットワークで先行詞と結びついているという感がある。いわば先行詞との一体感が大切なのである。つまり、ゼロ関係詞の場合は先行詞との間にはまったくポーズがないと言わなければならない。ポーズが入れられないのである。

このように、先行詞とのつながり、つまり密接度という点について検討するには、先行詞と後続の関係代名詞との間にポーズがおけるかどうかを考えてみるとよい。結論的には that ならポーズは少しはあってもよいし、wh-の場合はもう少しあっても問題は生じないことになるであろう。

さて、ゼロ関係詞はかなりシンプルな構造のものである。このことを次のような例で具体的に考えてみよう。

(1) the man I met

(2) the book you read

そして、上述のように、これらについては先行詞との間にポーズを入れることは考えられない。むしろいかにすばやく先行詞の後に続けて後続の S+V の部分を発話するかということが大切である。もし、

ポーズを入れると、(1)の意味は、「その人に、私は会いました」とでもなってしまうであろう。

次に、もしこのゼロ関係詞節に関係代名詞の that を入れると、たとえば次のようになる。

(3) the man that I met on my way home from work

これだと、少し文が長くなっても、that という合図があり、それによって後に関係代名詞節が続くことが示されるので、その点ではわずかなポーズなら置くことは不可能ではない。

また、wh-系の例としては次の例で見てみよう。

(4) the man who(m) I met yesterday on my way home from school

この場合も、who(m) という合図があるので、that のときよりも長い文になっても、いわば文の論理的な構造がしっかりとしていると考えられるので、少し長いポーズを入れても、意味は間違いなく伝わるであろう。そして、文体的にはこれは少し重いものとなっている。したがって、wh-系の関係代名詞は、息の長い文章を書くときにふさわしいと言えるであろう。

4. 後置修飾の構造および関係代名詞の選択について

一般的に関係代名詞は、先行詞があってその後節がくるという構造である。つまり、「名詞+文」という形式なのである。これはいわゆる後置修飾であり、名詞の後に文という形のいわば大きな形容詞がくることになるのである。このような修飾構造はいかにも日本人には違和感の禁じえない表現であろう。発想が異なるということでもある。

ただ、考えてみると、英語では2語以上からなる修飾語句・修飾節は後からかかるという、後置修飾の構造をとるということが大原則であるということに気づく。前置詞句にせよ、不定詞句にせよ、分詞句にせよ、すべてしかりである。a book on the table, good to drink, a boy playing in the gardenなどは、いずれも後置修飾の構造である。当然、関係代名詞節も必然的に2語以上からなる構造のものであり、必ず後置修飾の形式をとることになる。その意味では、関係代名詞はいつもひっくり返して後から訳していくことになるのである。発想の違いが実感される場面でもある。

そこで、関係代名詞節の後置修飾構造は英語学習上の前提として認めなければならないが、ただその後置修飾の分かりやすさということを考えながら、関係代名詞を用いることは大切なことであろう。その意味で、ここでは1つの目安として、節構造の長さということを考えてみたい。分かりやすさということを単純化して、節を構成する単語の数を1つの尺度として見てみたいのである。そして、その点から、関係代名詞という合図が必要かどうか、必要ならそのどれを用いるのかの判断がある程度できるのではないかということである。

まず、ゼロ関係詞節が用いられるにはかなりの条件があると思われる。その条件とは、シンプルな構造(短い節構造、やさしい口語的な表現内容など)ということが考えられる。合図がなくても後に関係代名詞節が続くことが瞬時に見分けられる必要があるからである。

今はまだ仮説の段階であるが、筆者は、ゼロ関係詞は、単純に考えて、2-4語くらいのもので、意味が分かりやすいものである必要があると考えている。そして、先行詞との一体感があり、たとえば *the man I met* のように一気に1つの大きな名詞句のように発話されるのが普通である。そのような場合なら、特に関係代名詞という合図がなくても簡単に後置修飾の構造が理解されるであろう。

また、5-7語くらいかもう少し多くの単語からなる節なら、*that* が用いられるであろう。そして、10語くらいかもう少し(あるいはもっと)多くの単語からなる節なら、おそらく *wh-* 系の関係代名詞が動員されるであろう。重い、息の長い文になるほど、*wh-* 系の関係代名詞の出番ということになるのである。このような節構造の長さを1つの尺度として関係代名詞の使い分けがある程度は可能なのではないかと思われるのである。関係代名詞という合図がなくてもよいレベルのゼロ関係詞の段階から、その中間的な *that* の段階、そして *wh-* 系の関係代名詞の出番となるやや長めの段階があるのである。それを1つの目安として考えて使い分けをしてはどうか。おそらくそれほど不自然な選択のしかたにはならないであろう。

もっとも、ここでは話を単純化するために関係詞節の構造をその語数を中心にして考えてみたが、特に *wh-* 系の関係代名詞が用いられる場合は、実は

その先行詞も長く複雑なものになる傾向があることにも注意が必要であろう。次のような例を参照してほしい。

- (1) *I have interests outside my daily professional work which give me great pleasure.* [Greenbaum and Qirk (1990: 369)]

5. 関係代名詞 *that* の特徴—— *that* はなぜ前置詞の後にこないのか

さて、「*that* はなぜ前置詞の後にこないのか」は大きな問題である。多くの中学生・高校生はこのことを学習するが、なぜそうなのかについては学ぶことはない。文法の研究書でもそのような「なぜ」について普通は答えてくれている。筆者自身もそれはなぜなのか、理由を知りたいと長い間思っていた。

しかし、これについては今やその答えを出して見ることができよう。すでに指摘したように、*wh-* 系の関係代名詞は、人称代名詞的な機能が濃厚であり、それはあくまでも代名詞としての存在であると考えてよいのだ。それなら、*to him, with him* などが可能であるように、*to whom, with whom* の語順が可能なのは問題のないところであろう。しかし、*that* については、つなぐだけに徹しているので、接続詞的な存在とみなすことは可能であろう。*that* が接続詞なら、*to that, with that* などのように、それが前置詞の目的語にはならないことは自明のことであろう。かくして、そのような語順は不可となることが説明されるのである。

また、*that* はつなぐだけなので、先行詞と *that* との間に、*to* などの前置詞など、余計なものを入れてはならないのは当然である。余計なものがあると、その接続機能が多少ともブロックされることになるからである。接続機能をあいまいにさせないように、何も介在させてはならないのである。そして、その意味では、あえて言うなら、*that* の前にはコンマも入れてはならないということである。つまり、非制限的用法は用いてはならないということである。まさに何もはさんではいけないのであり、それはゼロ関係詞の場合と同じである(ただしゼロ関係詞の場合は、上述のように、ポーズもはさめない)。*that* の場合はその直前にくるものは余計なものとして排除して、接続関係を明確に分かりやすく打ち

出す必要があるのだと言えよう。

6. ゼロ関係詞の特徴

さて、the man I met のような場合、その構造は名詞+文(S+V)ということであるが、ここで man と I とが連続していることに注意が必要である。それは、英語では名詞(句)の連続は、それが普通の単文ではなくその後に従属節の構造が続くことを予想させるものだからである。つまり、普通は、the man が用いられれば、その後には動詞がくるものと予想される。しかし、名詞の後にさらに名詞が続くということは、普通とは異なる文構造であることを聞き手は予想することになるのである。英文理解のための別のストラテジーがとられるということである。

それに、ゼロ関係詞節の特徴は、その節の主語にはほとんど人称代名詞が用いられるということであるが、そのことにも注意が必要である。そして、人称代名詞はコミュニケーションの場ではほとんど新情報を担うことがないので、情報量が少ないということにもなる。これも、ゼロ関係詞節がシンプルな構造をとるという視点から見ると大いに納得できることである。意味構造がやさしいということである。the computer I have などの表現も、情報量的には単に my computer というのと同じことである。

ゼロ関係詞は、すでに述べたように、シンプルな構造のものであり、理解がそれほど困難ではないものである。その意味で、ゼロ関係詞は口語でも多用されるし、やさしい英語でもあるのである。そして、やさしい口語的な表現として大いに英語教育の中でも指導されてよい項目である。

また、ゼロ関係詞はもともと英語としてはそのまま存在するものであるが、教室などではあえて関係代名詞の省略されたものと見ることは教育的配慮としては間違いとまでは言えない。しかし、考えてみると、that とゼロ関係詞とは統語的に近い振り舞いをするものであり、that はつなぐ機能に重点があるという意味でも、ゼロ関係詞に近いものなのである。したがって、ゼロ関係詞はもし何かが省略されているものと見るのならば、that が省略されたものと見るのが合理的である。

学校文法の中での指導では、接触節は関係代名詞の省略されたものであり、whom, which, that

の省略されたものと説明されている可能性が高いが、もしゼロ関係詞を whom, which の省略されたものとまで見るのは、いささか飛躍し過ぎということになるのではないかと思われる。統語的にはかなり異なる振り舞いをするものを同列に、同一のレベルで省略するとみなすことになるからである。3種類の関係代名詞節には3段階のレベルがあり、ゼロ関係詞と wh- 系の関係代名詞との間にはいわば2段階の差があると見られるので、その意味ではゼロ関係詞はもし関係代名詞の省略とみるのであれば、that の省略されたものとみなすのが妥当であろう。目的格の whom や which は、もともとそれが必要だと書き手が判断したからこそ用いられているのである。無造作に省略できると見るのはいかがかと思われる。

7. 制限的用法と非制限的用法

ここでは、非制限的用法におけるコンマの有無と、実際の音声的な特徴について述べておきたい。すなわち、関係代名詞の非制限的用法は、実は次の2つの音声的な特徴によって合図されるものであることに注意すべきである。

(1) ピッチが落ちること

(2) 前後に短い休止がくること

また、このような音声的な特徴は書き言葉ではコンマの使用となって表現されるのである。それが非制限節を主節から区別することになっているのである。事実、非制限的用法の関係代名詞節は、表記上、通例その前にコンマがくるか、その両端がコンマによって囲まれる。そして日本の英語教育では、そのコンマだけがやたら強調されているようであるが、それは実は話し言葉としての音声言語が軽視されていることの現れとも受けとめることができよう。残念なことに、これらの音声的な事実は実際にはきわめて大切なことであるのに、教室ではこの音声的な特徴についての指導がなされることはほとんどないのではないだろうか。むしろ言葉として大切なのは、上述のようなピッチの変動であり、ポーズの存在なのである。そして、書き言葉の場合にはそのことがコンマで合図されていると解すべきである。したがって、教室の中では、むしろ「なぜそのコンマがおかれているのか」というように、もっと口語英語の実態を考えさせる指導が望まれると言えよう。

8. 2文の合成による考え方や指導法は正しいか

さらに、2文の合成による考え方や指導法についても検討しておきたい。2文を合成して1文にするという指導法がこれまでしばしば用いられてきた。たとえば次のような例である。

(1) Taro has a friend. She speaks Chinese.

(2) Taro has a friend who speaks Chinese.

上の(1)では a friend という新情報が提供され、それについて、つまりその友人について(その時点では、旧情報となっているのであるが)、「その友人は(たまたま)中国語を話す」と述べられている。一方、(2)では a friend who speaks Chinese 全体が新情報として提供されている、と考えられる。つまり、最初から中国語を話すことは分かっている。「どんな友人か」(たとえば「中国語を話す友人」「英語を話す友人」など)を述べているのである。ここには大きな情報構造の違いがあるということである。a friend と a friend who speaks Chinese とは異なる表現なのであり、(1)を(2)に書き換えることはかなりの意味の違いがあることになるであろう。しかも、むしろ合成して1文にするというのであれば、次のようになると考えるのが自然であろう。

(3) Taro has a friend, who speaks Chinese.

だとすれば、これはむしろ非制限的用法ということであり、実際、ここの「コンマ+ who」は明らかに and she などと書き換えられるであろう。したがって、これは特に中学段階では適当とは言えない書き換えであり、ミスリーディングな書き換えであるとさえ言えよう。

それに、合成した文である(2)をもとの2つの文に戻すとすると、さらに問題が発生する。自動的に(1)のようにには戻らないのである。つまり、関係代名詞の who は、he で受けるのかそれとも she で受けるのかを決められないのである。2文の合成について、先行詞の人称・数・格は一致するが、性(gender)の区別は消失してしまうのであり、その点において情報量が減少してしまうことはあまり指摘されることはないが、承知しておく必要があるのではないだろうか。

なお、これについてはもし必要なら、通性(通性)の名詞ではなく、女性なら女性の名詞を用いると問題は避けられるであろう。つまり、a friend ではなく、a girl friend, a new girl friend などとしておくのである。

9. むすび

以上、いくつかの問題点を含めて関係代名詞の考え方を中心に述べてきた。wh-系(wh-)の関係代名詞、that、そしてゼロ関係詞について次のようなことが指摘できるであろう。

(1) 先行詞との密接度:

wh-系(wh-)の関係代名詞 < that < ゼロ関係詞

(2) 文体の重さ・情報量:

wh-系(wh-)の関係代名詞 > that > ゼロ関係詞

密接度が高いほど関係代名詞の合図は少なくよく、文体が軽いほど関係代名詞の合図は少なくよいことになるであろう。これらのことから、総合的に判断して、ゼロ関係詞を含めての関係代名詞の使い方あるいは指導法について検討すべきであろう。特に that、ゼロ関係詞にはそれぞれに特徴があることにも注意したいところである。また、非制限的用法のコンマの有無や1文への書き換えなどについてもより注意深い配慮が求められるであろう。

(注)

なお、本稿は、関係代名詞とその考え方について、主に高校の英語教師向けにその参考となるように意図して執筆したものである。したがって、現行の学校文法とはギャップの見られる部分もあることをご了解いただきたい。また、今回改訂の『デュアルスコープ総合英語』(四訂版)についても、本稿での考え方を必ずしもすべて反映させているわけではないが、参考書としては学習者にとって最も理解しやすいものになるよう配慮したつもりである。これまでと同様に、ご活用いただければ幸いである。

参考文献

- Greenbaum, Sidney and Randolph Quirk
(1990) *A Student's Grammar of the English Language*. London: Longman.
小寺茂明 (1990) 『英語指導と文法研究』, 東京: 大修館書店。
小寺茂明 (1996) 『英語教科書と文法教材研究』, 東京: 大修館書店。

(大阪教育大学教授)